

夏色の都、ウィーン

マダム節子

(江戸ソバリエ講師・日本橋そばの會会長)

今年の1月に訪れた冬のウィーンと街の様子を比べたくて、今度は夏のウィーンに行きました。今回は宿と航空券を予約し、あとは自由に過ごそうと決めた旅です。

ウィーンの夏は深緑の木々にあふれていて、冬とは全く様子が違いました。またこの短い夏を満喫するためでしょうか、レストランはどこもオープンテラスを設けます。客は店内よりも外のテーブルを好みますが、実際にも外の席が上席のようです。座って冷えたオーストリア産の白ワインを口にしますと、いつまでも留まりたい気分になるのが不思議です。

オーストリアはドイツ語圏ですが、私はドイツ語が分かりません。けれども何とか自力で地下鉄やバスに乗って動こうと、思い切ってザルツブルグ行きました。

ザルツブルク中央駅から8時半発の特急に乗って2時間余り、車窓の景色に見とれながら着いたザルツは映画「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台です。高原で歌うジュリー・アンドリュースの懐かしい姿を思い出しながらロケ地を回り、モーツァルトの生家では大作曲家を身近に感じ、勢いで小高い丘の上にそびえる城塞に登って上からの景色に絶賛。そして、気品があってそれでいて伸びやかなあのモーツァルト・メロディを浮かべながら、教会の天井画の美しさにしばらく見とれていました。夏に開催されるザルツブルグ音楽祭より前でしたので観光客もそれほど多くなく、思い切り楽しめた2日間の旅でした。

ウィーンは音楽の都です。王宮の礼拝堂で日曜ミサにウィーンフィルとウィーン少年合唱団が演奏するというので知人にチケットを頼みました。

厳かに始まったミサは言葉が分からない私でさえ気持が穏やかになり心地よく、そして天上のバルコニーから響き渡るウィーン少年合唱団のミサ曲は圧倒的な清らかさで、まさしく天使の声でした。荘厳なミサが終わり外に出ると、馬車が中庭に何台も止まっていました。

王宮と馬車は本当によく似合います。そういえば、ウィーン市内ではこの馬車のスピードに全ての乗り物は合わせていて道路をゆったり走る馬車の後にタクシーやバスが連なっている光景を何度も見ました。信号も少なく道路も歩行者が絶対に優先、人が歩けば車は必ず止まりました。

ニュースを見ますと、いまヨーロッパの各地でテロが起り、世界中を不安にさせていますが、ウィーン市内では特別な警戒はありませんでした。いつまでも続くテロの脅威を何とか平和的に解決がされ、どこにでも自由に旅ができるようになってほしいと願いました。

さて、今回のウィーン訪問では、前回食べ損ねた世界一有名なチョコレート・ケーキ《ザッハトルテ》への挑戦を楽しみにしていました。早速、ホテル・ザッハのティールームでザッハトルテと、暑かったので《アイスコーヒー》を注文しました。





銀のお盆にケーキとコーヒーとお水が載せられ運ばれてきます。お目当てのケーキは大きく、味は濃厚。アイスコーヒーはコーヒーパフェのようでビックリしました。完食をするとその日の夕食が食べられないと思ったので、食べ比べをするつもりだったもう一軒の、デメル《ザッハトルテ》は取りやめました。

コーヒーといえば、ほしひかるさんの小説『コーヒー・ブルース』に、ウィーンのカフェが出てきます。

きちっとした身なりの高齢の女性が、毎日車椅子に乗って、あるカフェを訪れるというのです。その女性客は施設の車がお迎えに来るまで、一杯のコーヒーで5時間ほど座って過ごして帰ります。カフェの店主の話によると、その女性は60年前、そのお店で亡きご主人にプロポーズされた思い出に生きているというのです。これはほしさんの創作かもしれませんが、古都ウィーンにぴったりの香り高いエピソードです。

それからもうひとつ、オーストリア人は《アイスクリーム》が大好きで、アイスクリームショップはどこも賑わっています。そしてザルツのケーキ屋さんで食べたアイスクリームはバニラの香り、口どけ感が絶品でした。



ウィーンで代表的な料理は「サウンド・オブ・ミュージック」にも出てくる《ウィンナー・シュニッツェル》(仔牛のカツレツ)です。だからといって、旅行中に毎日肉ばかり食べていますと大変なことになりますから、時々軽食にして胃を休めようと名物の《カナッペ》をテイクアウト。飲み物はザルツで日本語が話せるハンサムな青年に教えてもらったザルツ産のビール、この組み合わせはピッタリでした。



ある日のこと、ウィーン市内を気ままに散策しているとき、目に留まったショーウィンドウに、「エッ！」と思わず反応してしまいました。

小さな店で多分 BIO の食品を扱っている店だと思いますが、木製の篩と、粉が陳列されていたのです。「蕎麦粉はありませんか」とつつい尋ねたら、「ない」と言われました。たどたどしい英語だったので相手に伝わったかも不明です。そんなわけで「あの篩はどのようなときに使うのですか」と聞いたかったのですが断念しました。



フランスには《ガレット》、イタリアには《蕎麦パスタ》がありますが、オーストリアの蕎麦料理というのは、あまり聞いたことがありません。だからというわけではありませんが、次にウィーンに来るときには、「蕎麦打ちを企画しようかな」という気になりました。



夏のヨーロッパは日が暮れるのが遅く、外に行くと夜更かしをしてしまいます。旅も終わりに近づいてきたので、ウィーンの知人たちと夕食を共にしました。オーストリア・ワインを飲みながら時間も経つのも忘れ、慌ててホテルに帰る道は細く漆黒の迷路のよう、気がつけばそこはモーツァルトが晩年を過ごし「フィガロの結婚」

を作曲した場所でした。

「この道をきっとモーツァルトやシューベルトが作曲に悩みながら歩いたよ。」と言われれば、横道からふっと彼らが現れそうな錯覚にとらわれます。

ハプスブルグ王朝から現在までの歴史と文化を美しく保つウィーンは本物の“都”でした。